

賀川豊彦の畏友・村島帰之（その九）

第 105 回～第 117 回

賀川豊彦の畏友・村島帰之（105）－村島「アメリカ紀行」（2）

『雲の柱』昭和 7 年 2 月号（第 11 巻第 2 号）への寄稿の続きです。

アメリカ紀行（2）

村島帰之

（前承）

ハドソン河の底をくぐる

「芳の家」を出て、ついでにハドソンの地下道を通してニューチャージーを案内してやろうとあって、まづハドソン河の方へ出る。

ホーランド・ベヒキュラー・トンネルといって、ハドソン河の底にトンネルを作って在って、自動車はそこを快速力で通り抜けることが出来るのだ。

通行税を五十仙払って、自動車は六十五フィートの間隔を保って走る。

トンネルはワンウェーなので、衝突の怖れはないから飛ばす事飛ばすこと。トラックは右側を遠慮深さうに走ってゐる。両側は歩道のやうになってゐて、何哩毎かに警官の立ってゐるのが見える。何の事はない。鉄管の中を突っぱしてゐるのだ。走ること何哩かで、陽の下へ出る。そこがニューヨークの対岸、ニュージャージーの街だ。

ニュージャージー

一つ川を隔てただけだが、建物もさう建てつんではゐないで、郊外気分だ。

「ここからニューヨークへ通つたらいいよになア」

と、田舎漢がいふと、

「でも、君、通行税を毎日一弗づつ支拂つてゐちゃ耐るまい。それに、時間が大変だ」

と大原兄が説明してくれる。なるほどと感心する。

大原兄は、眺望のいいところを求めて、あちこちと自動車を走らせてくれる。で、時にはニューヨークとは全く反対の方向へ行くので、

「ここを行くとカリフォルニアへ出てしまやしないか」

とチョコクを飛ばす。

やがて川岸へ出た。戦役記念碑のある處で降り立つと、ニューヨークの魔天樓が衝立のやうに見える。遙か下流の方には、世界のエンパイア・ステート・ビルヂングが小人の交った大人のやうに首を出してゐる。

ビルヂングは主として赤だ。でなければ黄だ。四角な窓が、辨天縞のやうに見える。

折柄、雨。

ニューヨークが煙って見える。まるでキネオラマだ。そこには人が住んでゐるとも思へないやうに静かに立ってゐる。コンクリートの衝立は延々として川に臨んで立て連ねられて、殆どはてしが無い。

二十世紀の萬里の長城だ。これでは外敵は防げずとも、風は十分に遮ってくれるに違ひない。炎熱灼くが如きニューヨークの夏も故あるかなだ。

雨が大降りになりかけて来た。急いで車内へ這入る。

ニュージャージーの街はバンクーバーの上町を思はせるやうな美しい街だ。立木も多くて、街路樹が雨にぬれてゐる。葉が低く下ってゐるので、自動車が行くと葉にすれてしぶきが飛ぶ。

私たちは並木道で小二十分ほどを止めて休息する。雨は降ってゐても、車内は雨に洗れた景色を觀賞するに都合がよいだけで、ぬれる氣遣ひもない。

暫くして、砂糖工場のあるところへ行くと、下水道の鉄管に故障を生じたらしく、道路一面に水の氾濫だ。私たちはその水の中をつき切って走る。

夕方になって、帰途につく。此の度はトンネルに依らずにフェリー(渡船)に拠る。渡船といつても、関門連絡船のやうに自動車がそのまゝ乗る大渡船だ。

渡賃を五十仙払ふと、自動車はそのまゝ船へすべるやうにして乗込んだ。人間は両側のベンチに腰かけた儘渡して貰ふ。尤も、自動車上の人間は、自動車内に残ったままだ。

やがてフェリーは動き出した。向ふからもフェリーが来て行き違ふ。そして間もなく、ニューヨークの岸へついて、自動車は直ぐその儘地上へ走り上る。

ニューヨークは雨の中に夜となつてゐた。フェリーから程遠からぬところのチャプスイに這入って、再び大原兄の饗応を受ける。そして宿まで自動車で送り届けて貰ふ。

九時過ぎ、寝やうと思つてみると、大原夫人が見えて、ユニオンシャツを三枚持って来てくださる。日本から持って来たシャツや猿股では、洗濯へもやれまいとの心遣りからである。有難くこの差入れを頂く。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(106)―村島「アメリカ紀行」(3)

『雲の柱』昭和7年2月号(第11巻第2号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行(3)

村島帰之

(前承)

ハドソン川を下る

二十日

昨夜は夜半、南京蟲の襲来で眠りを妨げられたが、思ひ切って起上つて搜索を行った結果、見事に仇討を果したので、それからは善く眠つた。

九時半、ドラッグストアで、オレンジとサンドウィッチと牛乳とを食べて、今日はニューヨークの夏の娯楽場コネー・アイランド見物に出かけやうといふのだ。

高架で百十五丁目まで行って、(私の宿は)そこからコネーアイランドへ通ふ遊覧船に乗る。中央に大きなピストンのついてゐる船だ。地下鉄で行けば二三分で行けるのに船では一時間半かかるが、川の上からニューヨークを見るのも興があるので船を選んだのだ。

私たち(今井と二人)は甲板のベンチに腰かけて、移り行く沿岸のニューヨークのビルヂング街を眺める。

今にも崩れ落ちさうに高い建物が川に臨んで屹立してゐる。

私の宿の附近――つまりコロンビア大學に近い川岸のアパートが揃つて並んでゐるに過ぎないが、漸次川を下つて、ニューヨークの中央とおぼしき處へ来ると、エンパイヤーステートを始め数十階の大高層建築が亂杭齒のやうに立ってゐる。

更に下流へ行って、マンハッタン附近へ来ると、此処は古くからのニューヨーク市街でがっしり

した建物が一箇所に集ってゐるのが見られる。

マッハッタンの尖端を船の離れる頃、反対側の川中に、青銅の自由の女神の像が神々しく仰がれる。傍へ寄れば随分大きいものでもらう。女神の像見物の遊覧船が、その裾に小さく見える。

やがて船は沖へ出て、此度はロング・アイランドに沿って去る。ロングアイランドとニューヨークの一部で、地下鉄で川底をくぐって交通が出来るのだ。

コネーアイランド

コネーアイランドはその尖端にあった。船から見ると、海岸に臨んで、観覧車や飛行塔などが、玩具のやうに並んでゐて、その前面の汀にケシ粒ほどの人が多数に見えるのは海水浴場らしい。

上陸すると、棧橋は大変な雑沓だ。

遊覧地帯が廣いので、籐椅子に車をつけたやうなものをひいてゐる人力車夫がゐて「乗れ」といって頻りにすゝめる。

何の事はない。海岸の浅草六区だ。あらゆる娯楽機関の備ってゐる盛り場だ。日本人はこれを「夏場」とよんで、稼ぎに来るとかで、日本人らしい姿を店先に見かけた事が一再に止らなかつた。

二三時間、そこここをぶらついた後、私たちは此度に高架でニューヨークに帰る。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(107)ー村島「アメリカ紀行」(4)

『雲の柱』昭和7年2月号(第11巻第2号)への寄稿の続きです。

アメリカ紀行(4)

村島帰之

(前承)

天ぷら料理と芝居

二十一日

朝飯の後、大原兄をオフィスに訪問するつもりで出る。途中、エンパイアステートビル付近で店を開いて居られる松本さんを訪ねる。

恰度、夫人は、先週、船中で失踪した藤村壽氏夫人のお産に行つて居られて不在（夫人は州の認可を持って居られる助産婦である）男やもめの松本さんがご飯たいて、大根おろしなどを作って昼飯を御馳走して下さる。柔和な親切な小父さんといった気がする。

道に迷ふといけないので、タクシーで大原兄のオフィス—ニュースヒル—へ出かける。恰度、兄は藤村氏の事件を本社へ打電するので忙しい最中だった。助手の高田さんと初めて會ふ。

一時間ほど話し合つたり、なつかしい大阪毎日新聞を見たりして（そこで北村兼子の死を知った。さきには人見絹枝さんの死を、今は北村さんの死を、異郷で聞いて、二人ともに善く知つてゐる人だけに感慨無量だ）。

宿へ帰つて見ると、ワナメーカーから洋服が届いてゐる。早速着て見ると、少し長すぎると思つたが、今井さんから「日本人は短いのを着るのでお尻が見えてみつともない」といつて教えられる。

修道会（メソヂスト教会）の川俣義一氏が見えて、これから芝居へ連れて行つてやらうと仰しやる。今井さんの御相伴である。

その前に腹を拵へやうといふので「太陽」といふ日本料理店へ同行して、けふは天ぷら料理を御馳走になる。

タイムスケアーに程近いナショナル・シアターへ行く。

芸題は「グランド・ホテル」と言つて、三幕十場のレビュー式の演劇だ。ホテルを舞台として演ぜられる人生の喜悲劇の縮図といったやうなもので、女優と盗人の恋や、田舎青年とタイピストの恋などが巧みに織り込んであつて、言葉は判らなくても退屈せずに見る事が出来た。

小屋は他のショーなどに比して劣つてゐる。矢張り大衆向きのものにはかなはないのだらう。どの小屋でもさうだが、入り口の小さいのは一寸意外とする処だ。ホンの入り口だけを作って、他の表通りは他の店に貸してあるのだ。しかも、一度、足を場内に踏み入れると、堂々、宮殿の如き豪華壮美である。

表通りを大きく構えれば承知の出来ない日本の興行場などは學ぶところがあつてもよいのではないかと思つた。

芝居の開場が八時半、開演が九時といふのは、宵つ張りの文明人の一面を窺えたやうに思ふ。

（この号はここまでで終わる）

賀川豊彦の畏友・村島帰之(108)－村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和7年3月号(第11巻第3号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(1)

村島帰之

ワシントン市

八月二十二日

けふはワシントンに出かけやうといふので、今井さんと二人、九時十分、ペンシルバニアステーションへかけつける。夏季中に土曜から日曜へかけての、ウイークエンドの割引があるのでそれを利用するのだ。

夏季における週末の割引は、ほぼ半額に近いので、牧師さんの割引よりも割が善い。日頃、賀川・小川両牧師の割引を羨しがってゐる自分に取っては、いゝ知れぬ満足だ。

汽車は案外にすいてゐる。日本における郊外電車のやうなロマンスカーだ。ハイスピードで坦々たる平野を走る。

今井さんは、フィラデルヒアに神學生生活を送ってゐられたので、この辺の事に詳しい。汽車はニューヨーク州を離れて、ニュージャージー州に這入る。

「このあたりには日本の天とう蟲(?)がゐて、植物を食ひ倒すので、至るところに「日本蟲」を殺せといふポスターが貼られてゐますが、いい気持はしませんワ」と今井さんがいはれる。日本内地で被害が少ないのに、アメリカでのみ被害の多いのは、この蟲を喰べる蟲が、アメリカには育たないためだといふ。造化の妙を面白く思ふ。

フィラデルヒアを通る。アメリカ独立宣言の書かれたところだけあって、古めかしい赤煉瓦作りの家が立ち並んでゐる。

ここにはタエーカーの教会があつて、信者は質素な生活をしてゐるが、平和の徹底を期するため、戦争に絶対反対の意を表わし、その為圜圜の身となる信者も多いといふ。私たちは、それ等の人々の前に頭の下る思ひがする。

サイト・シーイング

汽車にゆられること約四時間で、ワシントン・ユニオン・ステーションに着く。

ところが雨だ。夕立のやうな――。

「困りましたね。サイト・シーイングでも頼みますか」

「さうませう」

さう話してみると、救世軍のやうな帽子をかぶった遊覧自動車案内人が、サイト・シーイングを勧誘しに来る。

「二弗五十銭で、目星しいところをおつれします」

「リンカーン記念堂もホワイトハウスも？」

「ええ、勿論」

そこで、私たちはそれに乗ることになった。十人乗りぐらゐのステージだ。しかし、乗り手は殆どない。同乗者の出来るまでは待たされるのだらうと観念して、渡された案内書を見てみると、何の事だ、ワシントン遊覧を三区に分けて、その一区が二弗五十仙となつてゐる。全部を見やうとすれば七弗も出さねばならないのだ。

で、私たちは、目星しいところを拾って、兎も角、二回だけ買った。

自動車はやがて三人ばかりの合客――いづれも白人で、その内二人までは女性であつた――を得て、漸く雨中を走り出した。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(109)―村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年3月号(第11巻第3号)への寄稿です。

アメリカ巡礼(2)

村島帰之

(承前)

北米合衆国政廳

街路樹の上に、白い大きなドームが見える。それがキャピタルであらうことは直ぐ想像出来た。車は雨に洗はれた美しいアスファルトの道をすべるやうにして走る。両側のポプラがぬれて目ざめるやうな美しさに光ってゐる。

丘の上に立てられた合衆國政廳は、尾をひろげた孔雀のやうに、華やかな中に威嚴を以て立ってゐる。王冠のやうなドームと、その尖頭に立てられた「武装せる自由」の像に一種の威圧を感じる。それに前面の階段が高く且つ廣いのも、いよいよ政廳の重みを添へる。

ローマ時代の建築を思はせる多数の圓柱は、美しい縞のやうに見える。その大建築の上に、へんぼんとして翻る星條旗も、外では味へぬ嚴肅さを感じさせる。

この政廳の中には議事堂、大審院等々があるのだといふが、私たちは雨を厭ふて、その儘、通りすぎる。

ワシントンの丸の内

政廳を中心とした一帯——丸の内といった感じの——は大きな官衛のオンパレードだ。案内人君はその一つ一つを「これは農務省」「これは陸軍省」と振り返り乍ら説明してくれる。

ワシントンの丸の内は、美しい油絵の町だ。至る所の街路を飾った樹木の間から、白い大きなビルヂングが覗いてはゐるが、ニューヨークで見るやうな、せせこましさもなく、また人を小馬鹿にしたやうな魔天楼もなく、のんびりと平面に延び、緑に恵まれて、むしろ、近代都市とは思へぬやうな落つきと静かさが味はれる。

リンカーンの臨終の家

やがて官街地帯を離れて十町目とかの商業区域を行くと、案内人は矢庭に、とある一軒の小さな家を指して「リンカーンがあそこで逝去されたのだ」と説明した。それは、赤煉瓦の四階建ではあるが、間口は三間とはない小さい建物で、観音開きになった窓が、一階に三つづつ行儀よく並んでゐる。これが大統領の逝去されたところとは思へぬやうな質素な建物だ。

リンカーンの人格が偲ばれて、私は自動車の中から振りかへり振りかへりして見送った。

自動車は住宅区域に這入って、クーリッジの住宅だの、ロングフェローの座像だのを見た。

銅像は無数にあったが、多くは武将で、ロングフェローのやうな文人は少い。これは日本もアメリカも変りがない。

私たちは、一体どこをどう案内されてゐるのか皆目見当がつかない。ステーションで買って来た案内記附録の地図と首っ引で、その所在を確かめるに一所懸命だ。

ワシントン記念碑

やがて広いグラウンドの前へ出た。すると、その中央に、とてもデッカイやすり型の方尖碑が立ってゐる。それがジョージ・ワシントンを記念するナショナル、モヌメントである。高さ五五五フィート——約一町半——世界一の大理石塔だ。

それが廣場のまん中に、只一つ、天に向ってキリのやうに立ってゐるのだから、見落さうとしても見落せない。恐らくはワシントン市中のどこからでも、この直線的存在が認められることだらう。

記念塔の尖端に、ピラミッド型に三角錐をなしてゐるが、そこだけはアルミニウムで出来てゐるらしく、雨の中に光ってゐる。そして記念塔の塔圓の大理石が、雨にぬれて、麗人の白い肌の触感を思はせる。

工費百三十萬弗、一八四八年に施工して一八八五年に竣功したといふのだから、正に三十七年間かかったわけだ。金のだぶついたドルの國で、そして突飛な事の好きなアメリカ人なればこそ出来る芸当だと思ふ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(110) — 村島「アメリカ巡礼」(3)

「雲の柱」昭和7年3月号(第11巻第3号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(3)

村島帰之

(承前)

リンコルン記念堂

車はその記念塔の周囲を一周した後、ゴルフリンクスの前を通り、大きな堂の前に止った。「リンコルンの記念堂です、下りて見ませんか」と案内人がいふ。しかし、はげしい雨足を見ると、車

中の誰もが下りやうとはしない。只硝子窓に顔をつけて、一心に見上げるばかりだ。

記念堂はクリスマスケーキを想はせるやうな白い函型のもので、大理石の屋根――といふよりは蓋といひたい――を十二本のローマ風の圓柱がガッチリと支へてゐる。この圓柱がまた世界一だといふのだ。そしてその正面、少し奥まったところに、大きなリンカーンの大理石像が見える。

リンカーンはドッカと大きな椅子に腰を下して、その巨大なる手を椅子の肘掛けに置いてゐる。いつも寫真で見る凹んだ眼、手入れせぬ顎髯、そして奮式なフロック、筋目のつかぬズボン――。

私たちは、遠くからではあるが、その堂内に電燈に照らされて、此方を瞰下してゐるその像を神々しくふり仰いだ。

ホワイト・ハウス

私たちの自動車は、又動き出した。ワシントンとアーリングトンをつなぐ美しい記念橋を遠望して引返す途中、ホワイトハウスの西人口の前を通る。

名の如く白い平家作りが、ローンや樹木の間から窺れる。前面には噴水が水をふいてゐる。花園には赤い花が咲いてゐた。毎日午前十時から二時まで、特にその東の間だけを公開して見せるといふが、雨は、またしても、みんなの出足を洩らせた。

自動車は、それから郊外の方へ走って、閉鎖されてゐるロシア大使館やウィルソン、フーバー邸宅の前を通って、公園に出る。道の両側に鹿の家などが見える。別に動物園などに限定せず、一般の見るに委せてあるところが気に入った。

無名戦士の墓

森林のやうな公園を抜けると、やがてアーリングトンの兵隊墓地に出る。古きは独立戦争から新しいのは歐洲戦争までの戦死者の白い墓が約一尺ぐらゐの高さで、まるで、マーチャンのパイのやうに並べられてある。そして、その無数の低い墓碑を囲んで、美しい樹木が立並んで永遠に静まりかへる勇士の魂をいたはってゐる如くに見える。

アーリングトンの墓地の元の地主の家を見て有名な「無名戦士の墓」へ行く。

そこにはギリシャ式の圓形舞台の所謂アンヒシヤターがある。円柱の並んだ美しい白亜の円形劇場の中は、矢張り白の大理石のベンチが並べられて、正面はギリシャ一流の舞台になってゐる。

舞台の裏へ出ると、そこは無名戦士の墓だ。ワシントン市街を一瞬の裡に瞰下して、大きな白い石が置かれてある。その上には美しい花環。

アメリカの兵隊さんが、テントの下で立ってゐる。
雨はまだ止まない。私たちは、その儘引返すことになった。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(111)ー村島「アメリカ巡礼」(4)

「雲の柱」昭和7年3月号(第11巻第3号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(4)

村島帰之

(承前)

赤煉瓦の旧市街

みちすがら、旧市街を通ると、赤い煉瓦建の多いのが目につく。聞けば、これはワシントン以前の建物で、英國から移住した人々が、郷里の煉瓦をその儘こゝに移したものだといふ。

案内者がいふ「ワシントン」が、ジョージ・ワシントンの事か、ワシントン市の事が判らないので、戸惑ふ。ワシントンの発音も、日本流の発音とは大分違ふので、うっかり発音も出来ない。すべて今井さんの通訳による。

私たちは、けふはワシントンで泊って、明日はフィラデルヒアに出かける予定だったが、アーリントンで雨の中を降り立たせられ、風邪をひきさうな気持がするので、今井さんにはすまないが、予定を変更してニューヨークへ帰ることとする。

六時、ステーションで夕飯をたべて、ニューヨークに向ふ。雨は愈々激しい。

ニューヨーク着は十二時過ぎてゐたが、キー生活の有難さは、同宿者への気兼ねも要らず、勝手にキーでドアをあけて自分の臥床に這入る事が出来た。

ニューヨーク

ロキシー劇場へ

二十三日

前日、雨にぬれたので、風邪薬を用心のため吞んで寝たので、けふはからだの調子もいゝ。
午飯をたべてから暫く昼寝をして、夕方からニューヨークのショーといはれるロキシーへ出かける。日曜だから大人だ。小屋の前へ行列を作って順の来るのを待つ。

入場料は一弗。中へ這ると、大きな金ビカのホールがあつて、いろいろの彫刻などがある。軽騎兵式のボーイが直立不動で立ってゐるのを合せて、寄席や活動へ来てゐる気がしない。

最初は映画「バッドガール」。ジェームスダン主演の筋のよいものだ。その後で音楽、ダンスなどがあった。

トーキーが、日本では到底聞かれぬほどの明瞭さを以て聞かれる。それに映書館の構造によるのだらう。靴でビロードの上を歩くのと、下駄でコンクリートの上を歩くのとの差だ。

メトロポリタン芸術博物館

二十四日

朝飯は、例によって今井さんが作って下さったのを頂く。
午後から中央公園脇のメトロポリタン芸術博物館へ出かける。

アテネ時代の墓石に赤い色彩を施してあるのなどは目新しく見えた。しかしその以後の彫刻に彩色してあるのは、折角の線の美しさを消して、味ひを滅殺してゐるやうな気がした。

ローマの大建築のイミテーションは壮大なものである。ミケランジェロのモーセなどが実物大で作られてあるのには一種の感慨の湧くのを覚えた。

画面ではミレーの牧場や、コロの風景、ドガの踊子など、日本に紹介されてゐる人たちのものが興を引いた。

博物館のうしろにあるエジプトから持って来たといふ尖塔は、世界に三つしかないもので、恐ら

くキリストも御覧になったらうといふ。

弗の国は金のあるに委せて他の國の宝物でも、何でも持って来るんだから耐らない。日本も國宝制度の制定がモット遅かったら、どんなに多くの宝物が國外へ流出したか判るまいと思ふ。その意味で、國宝制度を創った九鬼男の業績を称へたいと思ふ。

夜は松本さんのところへ行く。そして、蘆村博士から頼まれて来た輸血機の買入方をお願いする。

折柄、須藤さんといふカフェテリア経営者がやって来て、カフェーへ食べに来る職業婦人たちが、みな淫賣に見えて仕方がないといふやうな話や、警官が金次第で違反行為を見逃してくれる話などをされる。

カフェーでは客の椅子十五に對し、一つづつの便所を作る法律になってゐるさうだが、そんな事を実行してゐるカフェはニューヨークに一軒もない。いづれも警官に掴ませて済してゐるのだといふ事であった。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(112)ー村島「アメリカ巡礼」(5)

「雲の柱」昭和7年3月号(第11巻第3号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(5)

村島帰之

(承前)

動物園へ

二十五日

たまってゐた日記を整理して、書留で内地へ送る。

昼飯はホットケーキとミルクで済ます。ニューヨークへ来て以後、最も安価な昼飯であった。

午後からエル高架電車に乗って、二百二十丁目の終点まで行き、動物園に這入る。日本では園と

はいつてるが、ここは動物公園（ゾーロジカル・パーク）と書いてあるだけあって、とても広い。廣褒二六五エーカー、周囲十二哩といふことだ。

今日は入場料をとらぬ日なので、小供たちが無数に来てゐる。乳母車にのったのも沢山あった。日光の当らねアバートにゐる母親は、かうして愛児を日光にあたらせに来るのだ。

鹿と蛇と猿のコレクションが素晴らしい。蛇の中でもコブラや二十八呎の大蛇は目を引いたし、猿の中に白髪の老猿（？）の交ってゐるのは面白く見た。

多くの動物は、廣々としたところで、悠々と遊んでゐる。日本のやうな狭い柵の中に監禁されてゐるのは訳が違ふ。日本の動物園の動物は、アメリカの仲間を羨しがってゐる事だらう。それとも、小さい国に来れば、小さな檻も当然だとして諦めてゐるのかも知れない。

帰って入浴して、晚餐は武藤さんからよばれる。柴崎さんといふダンスの先生夫妻も一緒に。

児童虐待防止會へ

二十六日

十一時、松本さんから紹介して頂いた日本人會の香西さんに會ふため出かける。途中から雨。私は善く雨に會ふ。今井さんから「雨男」の称号を貰ふ。

慶大の學生松村幸男氏と同行、香西さんに引率されて、何とかビルの五十階上にある國際廣告社（アドルフ・モッセ）を訪れる。ここは世界各國の新聞社その他に廣告を取次ぐところで、独逸人の経営であるが、特に米人の好感を買ふために米國の名譽大佐ケルレ氏（日本の募債などに功勞があつて、勲三等を貰つてゐる）が顧問となつてゐる。私たちは氏とも握手をした。恰度、日本の蟹の罐詰の廣告を世界各國に向つてする際に、タイピストたちがそのレットルにメッセージをつけて各地へ發送してゐた。

私と今井さんは、それから香西さんの紹介状を持って児童虐待防止會へ出かける。家庭にゐては虐待される児童たちが、此處へ連れて来られると、一週間もすれば、すっかり元気な兒になつて愉快な共同生活をするといふ事だ。唯最初の数日、慣れないために逃亡する兒があつてはならぬので、窓には金網がはられてゐた。各種の宗教の礼拝もするといふ事であつた（猶太は金曜）百八十二名の収容兒の中、見るところ黒いこどもが多かつた。

私がカメラを向けると「私も私も」といつて撮つて貰ひたがる。普通の小學校と選ぶところがな

い。この會長は虐待する親に對して刑の請求も出来るので、慈母と嚴父の両面を持つ人でなければならぬのだ。私たちはその會長に會った。

夜は今井さんが留守なので、一人でカフェテリアへ行つて、その帰途、黒人たちのショーを見に行く。黒人を見慣れぬ私たちには、それは怪奇に見られた。入場料は白人のそのの半分一二十五仙であつた。観客は大部分が黒人で、ホンの少数の白人が混つてゐた（或はそれも混血児なのかも知れない）。

大原兄の招宴

二十七日

午後から百五丁目の **Chality organization society** と **social agency** を訪問したが、オフィスがあるだけで、レポートを貰つて帰る。ついでに社会事業方面の本をと思つて、ラッセル・セージ・ファンデーションを訪れたが、私の欲しいと思ふやうな書物はなかつた。

歸りにワナメーカーの裏の古本屋街を素見して、犯罪に関する書物などを二三冊買ったが、その中の一冊は著者が友人に献本したものでその自署がついてゐた。

宿へ歸ると、バンクーバーの有賀千代吉氏の手紙が、私の行くあとからあとから追っかけて、一月目に漸く私の許へ届いた。トロントのYMCA大會の模様を氏の大陸日報へ通信してくれとの依頼状なのだが。

夜は大原兄の招待。自動車で迎ひに来てくれる。客は今井さんと私の外に、助手の高田さん、大毎の森岡兄の四人。

大原兄のアパートはアップタウンのハドソン河に近い静かな處だ。小じにんまりとした住ひだ。奥さんの若い頃の帯在地で、小さいテーブル掛を作つたりなどしてあるのがうれしい。

夫人手製の刺身や豆腐やいろいろと沢山御馳走になる。デザートには絶えて久しき榮太桜のヨウカンが出た。

食後、みんなで盛に喋舌る。今井さんの「ロシアの協同組合」の話は一同傾聴した。十二時また大原兄のドライブで宿まで送つて貰ふ。夫人も同乗して送つてくれる。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(113)－村島「アメリカ巡礼」(6)

「雲の柱」昭和7年3月号(第11巻第3号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(6)

村島帰之

(承前)

マーヂー百貨店

二十八日

午後からマーヂー百貨店へ買物に行く。今井さんの忠告でトランクを一個買ふ。九弗。それから真理子のために人形を一つ。

拾銭店ウルウォースへ行って、ごたごたと拾銭の品物を買ふ。

夜は寄席に行くつもりだったが、今井さんがお友達に會ひに行かれて帰りが遅くなったためやめにする。晩食も十時まで待ってゐたが、ひとりで出かける。

貧民窟視察

二十九日

起床早々ーといつても十時頃だがーサブで正金銀行へ出かける。

前に書くことを忘れたが、私は、クリーブランドのホテル(多分さうだらうと思ふ)で、信用状のサインを盗まれた。信用状とサインの台帳とは別々に保存せよとの注意を銀行から受けてゐたので、信用状は腹巻に、旅券と一緒にふところ深く保存し、サインの方は、銀行からくれたサックに入れたまま、鞆の中へしまっておいた。盗んだ人間に、そのサックが紙入になってゐるのを見て、テッキリ金だと思つて持つて行つたのであらう。

「でも信用状でなくてよかったですね。近頃は善く信用状を盗まれて、大騒ぎをする人がチョイチョイあるんですよ」といって、行員の人は快く金を出してくれた。腹巻の有難さを泌々と思ふ。

十二時、約束によって、日本人會に香西さんを訪ねる。そして近所のカフェーで午飯をすませて、貧民窟視察に出かける。

市営共同宿泊所

まづ東二十五街四三二～四三八の市営共同宿泊所へ行く。書記のテーラー氏が案内してくれる。ここは三弗以上の金を所持してゐる者は泊めない。またニューヨーク州の者は五日まで継続宿泊を許すが、ニューヨーク州以外の人間は一日しか泊めてくれぬ。

ここへ泊りに来た者は入口で宿料を支払ひ、まづ消毒所へ行って、着衣を網戸の中へ放り込んでシャワーにかかる。からだ綺麗になったところで、御仕着せの白のナイトガウンを着てベットへ行く。着衣は網戸に這入った儘、消毒されて、翌日彼が仕事に出かける時には、無菌のものを着ることが出来る仕掛けだ。

ベットは二階仕立で一室に二百以上も並んでゐるが、その一つひとつがスプリング附で新しいシートと、毛布とが、賓客を待ってゐる。女子供の部屋は別になってゐて、そこにはピアノやおしめ洗ひまでが備えてある。

宿泊者は一夜千二百人を越えるが、常に満員の盛況なので、隣接の造船所を買収し、宿泊所に急造したので、そこで三千の人間を泊められるといふから、都合四千二百の人がここに眠りをとる勘定である。

ドックの宿泊所へ行って見ると、だだっ廣いそして天井の高いところに、三千のベットがまるで公会堂のベンチのやうに行儀よく並んでゐる。何だか、兵隊屋敷のやうな気がした。

食事は二食附、散髪もお互同志でやるやうにと、バリカンも備えつけてある。

宿泊所は同時に労働紹介所を兼ねてゐるので、宿泊者はその世話で日々どこかへ仕事にやって貰へる。そして稼いだその日の賃金の中から食費、宿泊、その他の費用として五拾參錢を引去って、その残りが手渡されるといふ訳。

しかし、五拾三錢といふ金を引かれる事を苦痛とする者は、或は一夜貳拾五錢の救世軍の世話になり、或は夏季、雨のない際などは、公園に眠ることを許されてあるのを幸ひ、青天井の下で夢を結ぶ者も少くないといふ。

なほ宿泊所では、一般失業者のため、毎夕食事を給与してゐるが、一月以来の給食数は八月まで五拾錢入の多きに達してゐるといふ。

この所長ユーゴー・デイスといふ四十格好の青年は、市長選挙の際に応援演説をやってその功でこの所長の椅子を勝ち得たのださうだ。

「けふは日本のレディーが来るといふので、彼奴、ネクタイをしてゐるが、ふだんは、宿泊者と同化するため、わざわざネクタイもしてゐないんですよ」と、香西さんは今井女史を顧みて説明した。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(114)－村島「アメリカ巡礼」(7)

「雲の柱」昭和7年3月号(第11巻第3号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(7)

村島帰之

(承前)

市営公衆浴場

私たちはそこを去って、直ぐそばの公衆浴場 **Public bath of City New-York** を見る。石鹸タオル持参の者は無料。それを借りるものは五銭を支払へばいゝのだ。

奥には広いプールがあって泳ぐことさへ出来るやうになってゐるが、男女隔日になってゐて、プールを使用出来ぬ性のものは、シャワーにかかることになってゐる。

けふは女がプールを使ふ日で、私たちはそれを見る事が出来ず、今井さんだけが、それを見る特権を与へられた。

一日の入浴者千三百を越えるといふ。

向ひには動物愛護会の事務所があつたが、人間愛護の方を見たいので素通りにする。

ニューヨークのドン底

いよいよ西部ニューヨークの貧民窟に奥深く這入つて来た。
煉瓦敷の舗道といへば綺麗にも聞えるが、掃除の行届いてゐないことは、その舗道一面に散らかった紙屑で知れやう。まるでゲームの終わった後の日本のグラウンドのやうな落花狼籍の有様だ。

家は同じ煉瓦作りの七八階建。といっても、中央部に見るやうなアパートとは事変わって、黒く煤けた見るからにきたらしい巢だ。

各階の一つ一つの窓から青ざめた顔が覗いてゐるばかりではなく、各戸の入口には、大勢の人々が、日本の夕涼のやうに外へ出てゐる。室内は暗く、そして風通しが悪いので、かうして明るみに出て涼を入れてゐるのだ。戸外は高層建築が立てつまつてゐるので、風一つ通らないが、それでも室内よりは涼しいといふのだらう。

聞けば、此の陽も射さぬ部屋が、どんなに安いところでも月十一弗はするとかで、そのため一室をカーテンで仕切って二家族以上が同室してゐるのもあるといふ。

夜も、もちろん、ドアを開け放って寝なければ眠れない。

毎夏、ニューヨークに暑熱のため死人があるといふのは、実にこの辺の事なのだと首肯された。

「何しろ、一つのベッコに五六人のものが寝てゐるんだから悲惨ですよ。この辺からワナメーカーあたりの賣子が出てゐますが、年頃になれば飛び出して娼婦の群に入るのも、或は当然なのかも知れませんね」

と香西さんは嗟嘆される。

娘の誘拐事件の多いこともうなづかれる。

一セント食堂

マンハッタン橋に近いところへ出ると「壹錢食堂」といふのがあったが、生憎、夏季で休んでゐた。

香西さんの説明によると、パン四枚とコーヒーとシチューとで一仙だが、ここへ来るやうな人たちは、一仙も無駄には費さぬやうに心がけて、四枚出たパンの内、二枚だけはタンマリとバターをつけて喰べて、残り二枚は、明日の分としてふところに納めて歸って行くのだといふ。

私たちが、その食堂の前にゐると、附近のこども達が集つて来て、じろじろと見る。おとなの連中もじろじろと眺める。

「あの中に猶太人がゐるのが判りますか」

と香西さんがいふ。

「鼻が高くって、眼の太い、額の廣いのは、大概ジューですよ」

私はベニスの商人のシャイロックを胸に思ひ浮べた。

表通りへ出る。市区改正で、一部の貧民窟が取払われて、貧民長屋の裏が表通りに出てゐるところなどがある。三十間道路に面して、洗濯物の吹き流しの見えるなんぞは、確に珍景である。

この辺の映画館はさすがに入場料二十仙にしてゐる。

萬 國 教 會

漢字で「萬國教會」と記し、脇に **all naitions** と書いた一つのセツルメントへ這入る。

こゝは元賭博場で、殺人なども屢々行われ、また自殺倶楽部などもあったといふ物凄い場所だ。中身の廣さに比し入口の狭いのもそれらしい感じがする。

その後、ここを借りた一人の老婆が、気の毒な支那人の孤児を養育したのが発端で、その後諸外國の移民のこどもの世話をするやうになり今日に及んだのだといふ。

現在では伊、露、支、英の各國人を米化するために英語學校をやったり、授産事業の一つとして印刷をやったり、裁縫をやったりしてゐる。そして此處の特色は他のセツルメントが雜種國民に一つの宗教を強制するのは悪いといつて宗教教育をやってゐないのに反し、ここは新教、奮教、猶太教の各宗教を時間を替へて礼拝させてゐることだ。「萬國教會」の名はそこから出てゐる。

そのために、此處の事業を支持しやうとして三十四箇國の國民が淨財をさゝげてゐるといふ。

プールもあつた。屋上ではゲームも出来た。

救世軍の共同宿伯

去つて、此度はバーレー区域の救世軍のメモリアルホテルへ行く。ホテルの前には大勢の労働者が集つてゐた。その中を這入つて行くと、暗いオフィスに働いてゐる士官が、快く案内してくれる。

エレベーターに乗ると、そこには「禁酒」といふ制札が大きく記してあるのが目につく。他のホテルでは、禁を破つて呑む手合もあるのだ。

ここには約二百のベツクがあるが、一夜の泊り賃參捨錢を出せば、洗濯もたゞ、バスもたゞ、それに朝飯にはカフェの残り一ーといふても食べ残しではなく、台所に売れ残つたもの一ーのオートモミールと監獄製のパンが提供される。そして、六日泊つたものは七日目の一日は宿泊料を免除することになつてゐる。

なほ朝のミールは、宿泊者以外の失業者にも与へるが、日に二千人内外の人がつめかけるといふ。

大分、疲れたので貧民窟視察を打切って帰る。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(115)－村島「アメリカ巡礼」(8)

「雲の柱」昭和7年3月号(第11巻第3号)への寄稿、最終回です。

アメリカ巡礼(8)

村島帰之

(承前)

バーレスキュー見物

夜は大原夫妻の案内で、アポロへ「バーレスキュー」を見に行く。さすが、エロを賣り物にする見世物だけに、女子は稀れで、男も老人の多いのが目に立つ。かぶりつきの辺に禿頭の多いのを見て「特等席かい」と酒落る。

「特等ではないが、あすこにみると、ダンサーが禿頭にキッスしてくれるので、キッスをして貰ひたさに、あそこへ頑張ってるんだよ」と大原兄が説明してくれる。

ニワカのやうなジョークが幾番か演ぜられる。ズロースが飛出したり、スカートの下へ鏡を置いて見たり。サックを出したり、いやはや。

そしてそのジョークの合間々々には、女が出て来て、音楽に合わせて、一枚々々着衣をぬいで行く。それも、立てつづけにぬがずに、乳当てをとっては下手へ引込んで、また現れて、スカート口をとり、差しさうに引込んで、また現れ、最後には一点を除いた真裸になる。

それを見て、ヤンヤといふ拍手喝采だ。

女の裸体を見慣れてゐるアメリカの人たちにとっては、真裸体よりも、むしろ着衣形から裸形へ移って行くその課程にエロチックな興奮を感じるのであらう。

大原兄の御馳走になって帰る。

レパブリックへ

三十日

ベッドに南京蟲がゐるのにはすっかり弱らせられた。世界一の大都市へ来て南京蟲に悩まされやうとは、お釈迦さまでも御存知なからう。サブの中などには沢山ゐるさうだ。

いよいよニューヨークを立つ日も明日となったので荷物をまとめる。大部分はトランクへ詰めて桑港へ直送するつもりだ。

トランクといへば百貨店から屈けて来たのを、前夜に預った階下の番人は今朝、私の部屋へ届けて来たので今井さんが拾五銭やると「コンナ安いサービスをした事がない」といってつぶやいて行ったさうだ。

夕方から、ひとりで寄席へ行く。六アベニューのジークヒールドへ行ってみるが、マチネーで夜は休演だ。やむなくタイムスケーアまで歩いて行って、レパブリックといふのへ這入る。

前夜のアホロと同じやうに花道があつて、裸体の女が、わざわざ肉体を見せに踊り乍らやってくる。白人たちは、下等な好色感を起こすのだらうが、東洋人はその女たちのキメ荒い肌を見せられて、むしろ、嘔吐を催すほどだ。

ジョークも下等なもの揃ひだ。どういふものか、新婚の夫婦を主題としたものが多い。そして、露骨に、第一夜のベット物景を見せたりする。

便器だの、サックだの、バナ、だのと下品な小道具がふんだんに使はれる。ダンスの尻振りも顔負けだ。

ニューヨーク出発

三十一日

書籍を四つ小包にして内地へ送る。少くとも一弗以上取られると思つたら、四十五仙ですんだ。午前中に武藤さんの嬢ちゃん恭子ちゃん（三つ）と遊んでくらしした。日本に残した真理子を思ひ出しながら――。

いざニューヨークを去るとなると、名残り惜しい。近所に住む黒人の顔もなつかしく見る。六時、タクシーを呼んでいよいよ出かけるといふ時、インタナショナルハウスに泊つてゐる佐藤菊重さん

から今井さんへ電話だ。到頭會はずに立つ。

グランドセントラルステーションには大原夫妻と松本さんと高田さんと、それに大原夫人の友人の方が見送りに来てみて下さる。

シカゴへの電報は大原兄がタイプライターを取出して打ってくれる。松本さんは晩飯は未だだらうからといって「芳の家」の壽し弁当を贈られた。

私はニューヨークを思ひ出す毎に、これ等の親切な人たちを思ひ出す事だらう。

車中で喰ったすしのうまさ。われ等が壽しの美味に舌鼓を打つてゐる間に、汽車は次第にニューヨークの街を離れて行った。

三度シカゴへ

九月一日

今井さんと協議して、なるべく経済的な汽車に乗ったので、汽車は小駅をも一つ一つ寄って行く。ニューヨーク、シカゴ間で九弗の特急料金（エキストラフェア）を支払った汽車に比し五時間位は遅いのだが、已むを得ない。尤も寝台はあるが。

眼をさましたのが十時、十一時に朝昼兼用の食事をとる。午後は少し眼る。

夕方、五分停車の駅でサンドウィッチと牛乳を買って、それで晩餐に替へる。汽車の食堂はどんなにしても一食一弗から一弗半はとられるので萬事節約だ。また大多数の客は私たちと同じやうにしてゐるらしい。

八時、シカゴ到着。今井さんはYWCAへ、私はYMCAへ。

湯に這入って、ぐっすりと寝ることにする。南京虫もゐないから安心して。

二日

YMCAはニューヨークの宿よりも居心地がよいので、十時過ぎまで眠った。朝兼昼飯を近所のカフェで喰べて、それからは手紙を書いたり、原稿を書き出したりする。そこへ今井さん来訪。頼んでおいた本をシカゴ大學で買って来て下さる。

夕方から一緒に御飯をたべに出る。恰度ラッシュアワーに出會したが、オフィスガールが列を作ってステーションへ繰込む様は物凄い。

盛り湯を歩いたが、余り見たいショーもないので、別れ別れに宿へ帰る。

ハロハウス

三日

午後一時今井さん来訪。シカゴ大学の加藤さんにつれられて、ハロハウスへ行く。
ハロハウスへはマグドナルドも来た事があると今井さんが説明してくれる。

建物は最初に幾度か建増ししたといふが、どっちかといふと貴族的な感じだ。

中へ這入ると「ハロハウス、ハズノーガイド」といふ。見せてくれぬのかと思ふと、さにあらず、十四歳になる女の児が各部屋を見せてくれた。つまり、見世物のやうに思はれたくない理事者の心なのだらう。が、少しキザに聞えたのは此方のヒガミだらうか。

時代のついた皿や寫真がデカデカと並んでゐる。何から見ても社會事業の元老で、新鮮味がないやうな気がする。劇場は立派なもの。こゝもまた宗教教育は一切してゐない。

雨に降られて帰る。私は雨男だと泌々思ふ。しかし、そのおかげで涼しくもあつたのだ。
六時から島津岬氏宅で御馳走になる。これで四度目だ。すまなく思ふ。
けふは天ぶらの御馳走だ。おすましもうまかつた。

YMCAで講演

八時、私の講演がYMCAで始まる。私は島津さんの作った「ドン底生活」といふ演題に適應するやうに、カフェー、性業者、犯罪、といった風な順序で日本の社會事情を話した。

近く関西學院へ来て教職をとるといふ人などに會ふ。
柳田さんからは米國政府の出版目録を貰ふ。

十一時、タクシーで、大陸横断二千哩の旅に上るべきノーザン・パシフィックのステーションへ行って、桑港行の汽車に乗る。
シカゴよ、さやうなら。

(この号はここで終わり)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(116)－村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和7年4月号(第11巻第4号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(1)

太平洋沿岸

村島帰之

再び米大陸を横断

九月四日

眼がさめたら私は米大陸横断列車の中にあるのだった。コーンの畑がづく。平凡な汽車の旅だ。

夕方になって、あたりの景色が三宅克己の水彩画のやうに、単色に近いさまざまな色で彩られ始めた。旅愁を感じる。

隣のセクションにみたアメリカ紳士が私の處へ来て、歐洲戦争に出征して日本人とフランスの戦線と一緒に戦った話や、現在やってみるといふ児童保健事業の話をする。今井さんのカーは三つほど離れたところだから、通訳を頼む訳にも行かず、小一時間、ブロークンで話す。

五日

けふも汽車は砂漠の間を驀地に走る。

朝飯は、汽車がグリーンリバー駅に着いた時、急いで降りて行って、待合室の食堂でメロンと牛乳とで済ます。

昼飯は今井さんと一緒にオグデン駅の食堂で食べる。四十分余の停車なので、ゆっくり喰べることが出来た。

そこの賣店にアメリカインディアンの子供の玩具がその儘郵便で出せるやうになってゐるので、健一に送ろうとしたが、郵便箱が小さくて這入らぬので困つてゐると、「あつちに大きいポストがある」と白人が教へてくれた。

なるほど、小包でも這入るほどの大きな郵便箱があった。果して、このオモチヤの郵便が日本に

届くかどうか甚だ疑問だ。

夕方近く、ソルトレーキを過ぎる。塩が固くなって、しょうが糖のやうに白く固形化してゐるところもあれば、白い粉になってゐるところもある。また、まだ水のまゝのものもある。それがいづれも一つ一つの湖をなしてゐるのだから素晴らしい。

塩の加減で岩まで浮いてゐる――と洒落たかったが、そばには誰もゐない。

シラネバタ山彙

六日

目をさますと、リノ市だ。有名な「離婚の市」だ。上品なコテージが点綴して見える。

景色は漸次美しくなって来た。前日来の砂漠とは違って、アメリカ松の密林が見られる。シラネバタ山脈に這入って来たのだ。汽車は断崖絶壁を行く。

美しい湖水が木の間から瞰下される。カメラを向けると汽車はトンネルに這入って了ふ。トンネルを出れば、また雪崩を防ぐとりでのやうな組木の中を行くので寫真がとれない。

崖の下のドライブウェーを自動車の走るのが小さく見える。至るところ巖石だ。木だ。トンネルの補修工事の工夫の中に、日本人らしいのが、こっちを凝と見てゐるやうだ。

シラネバタ山彙を過ぎて平原にかかる。サクラメントの附近は至るところに、マグサの野とそこに放牧された牛馬の姿を見た。オグデンから隣のセクションへ乗った米人の娘二人が私にチョコレートをくれた。人情に色の差別はない。

午後になって海が見え出した。

太平洋だ！ なつかしい太平洋だ。パークレーの町は湾に面した斜面に箱庭のやうな美しい人家を見せてゐる。やがて金門湾が見えた。

あの向ふが日本だ――。さう思ふと、富士山が直ぐ向ふから顔を出しさうな気がしてならない。なつかしい太平洋の波が、午後の陽に金色に映える。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(117) - 村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年4月号(第11巻第4号)への寄稿の続きです。

アメリカ巡礼(2)

太平洋沿岸

村島帰之

(承前)

桑 港

オークランドからフェリーに乗替る。隣りの白人の娘二人も乗替だ。私は彼女たちの好意に酬いるために、紙でカブトを折って与へた。彼女はうれしそうに、それを手にした儘、どこかへ行ってしまった。

フェリーは開門連絡船を少し大きくしたやうなものだった。

船が進むにつれて、桑港のスカイラインが、まるで蜃気楼のやうに見え出した。日が既に西の方へ傾きかけてゐるので、街はただ一色に薄紫で彩れてゐるのみだ。

桑港とオークランドとの間には近く大きな橋がかゝるといふ。

約十五分でフェリーステーションに着。駅に秋谷一郎兄が出迎へに来てくれてゐたのはうれしかった。

小川ホテルに入る

早速、秋谷兄の案内で、同兄と父君が経営して居るカリフォルニア街の小川ホテル(桑港の日本人ホテルの首位を占める)に行く。小じんまりした日本式のホテルだ。早速、風呂に這入って五日間の垢を落す。

夕飯は秋谷兄からすき焼の御馳走になる。お客は今井さん、今井さんを訪れて見えた山田さん及び私の四人。

秋谷兄は開西學院文科の出身。私とは学生時代からの知己で、学校を中心にして話がはずむ。

山田さんはバークレーで善く邦友学生のお世話をされる方で、今井さんもそのお世話になった一人だ。そして、山田さんは久しい以前からの「雲の柱」の読者で、殊に、特筆して置きたいことは、

神戸イエス團の夏季學校に毎年百弗以上の金を集めて送ってこれらることだ。今年も百弗を送って下さったといふ。

賀川先生と合流

六時からレフォーム教會に開れる賀川先生の講演會へ行く。

桑港は坂が多い。ホテルから會場までに私たちのミシンは二つ丘を越えた。

十何日振りかで賀川・小川両先生と手を握る。なつかしき一杯だ。

「どうでした。たっしやでしたか。心配してゐましたよ」

と小川先生が私の肩に手をかけ乍ら泌々と聞いて下さる。私は久しぶりで兄貴に會つたやうな気持ちが湧くのだった。

先生は、けふはこれで六回目の講演だといふ。さすがに疲れられてゐる様子だ。講演後、例によってサイン攻めに、先生の目は真っ赤に充血してゐるのを見た。私は先生の健康を祈らずにはゐられなかつた。

沖野岩三郎氏との奇遇

七 日

疲れてゐたのでグッスリと寝たが、汽車中の習慣が私を早起きさせた。賀川・小川両先生は秦牧師の宅で泊られたが、私だけはカリフォルニア街の「小川ホテル」で桑港における第一夜を送つたのだ。

ホテルの食堂で秋谷兄と一緒に朝飯をとる。食堂には富士山を書いたふすまがはまってゐる欄間もある。私は全く日本へ歸つたやうな気安いい心持になつた。

正午、支那入街の「昭和桜」で開かれた賀川先生、沖野先生送別會に出る。

私はたへて久しい沖野先生の隣りに腰を下した。沖野先生は日本一の座談家だけに、面白い話がつづく。先生が桑港で黒ン坊の女から「カムオンパ、」と呼ばれた話など。

先生はそこからまた自動車で説教に行かれる。小川先生は書類の整理のため、私は休養のためお伴しないので、先生独りで行かれる。

秦さんの教會を一寸覗いて小川ホテルに歸り、小川先生及びシャトルで別れた切りの成瀬さんと

三人、ホテルの食堂で夕餐を共にする。

(つづく)